

オオカミが来た!? ④

宗像 充

ルポライター

■前回までのまとめ

日本のオオカミ（ヤマイヌとも言った）は、一九〇五（明治三八）年、奈良県東吉野村鷲家口^{わしかぐち}での捕獲を最後に人々の前から姿を消したとされる。

日本国内の食物連鎖の頂点にいたオオカミがいなくなったことで、自然生態系は崩れ、シカによる植生の被害、あるいはイノシシなどによる農作物の被害が大きくなったと言われている。

失われた自然生態系を取り戻そうと、タイリクオオカミの日本列島への「再導入」論が一部で起きている。とくに西日本地域で増えたシカの食害に対して、有効な対抗策として、導入は期待される向きもある。

一方で、タイリクオオカミとは別の、固有の種であ

るニホンオオカミはいまも生息するとして、探究活動を繰り広げる人々もいる。実際、目撃談も多数ある。なかでも八木博（埼玉県在住）はその代表格だ。

日本のオオカミをめぐる研究と探索を複雑化させているのが種の問題だ。日本にいた（いる）オオカミは、ニホンオオカミという固有種とする説と、タイリクオオカミの亜種だという説があり、対立している。

そもそも日本のオオカミ研究は、一九世紀、欧米の分類学の手法を用いてヨーロッパで始まった。ところが、ヨーロッパに持ち込まれた標本が、当時の日本列島の人々が見知っていたオオカミやヤマイヌと同じものかといった疑問すら浮かんでいる。それによって分類学上の混乱、名称の混乱も生じた。

タイリクオオカミもいた

戦後も多くのオオカミ探究者たちが日本各地の山野でオオカミを探し、タイリクオオカミと違う特徴を列挙してもいた。

しかしもし、伝聞と古文書を根拠とするニホンオオカミ像が、分類学のタイプシステム自体を否定することになれば、もはや統一した物差しなど提示しようがない。今後ニホンオオカミと類推される動物が捕獲されたとしても、もはやそれをニホンオオカミと判定する根拠がなくなってしまう。

導入論の側からすれば、ニホンオオカミがタイリクオオカミと別種となると、それは種の復活ではなく、外来種の導入となってしまう。当然、別種説には否定的だ。



奈良・東吉野村に建つニホンオオカミ像。後方の川原で“最後のニホンオオカミ”が捕獲された

現在、上野の国立科学博物館（科博）では、一〇月五日まで特別展「太古の哺乳類展―日本の化石でたどる進化と絶滅」を開催している。迫力あるナウマンゾウやマンモスの化石で連日大賑わいだ。約一億二〇〇〇万年前の恐竜の時代から、一万年前までの哺乳類の進化史を順番にたどっていくと、約七八万年前から一万年前までの更新世後期の動物群の展示の中に、トラやヤベオオツノジカ、ニッポンサイなどの大型動物に交じって、静岡県浜松市で発見されたタイリクオオカミの化石が並んでいる。

栃木県葛生、山口県秋吉地方、青森県尻屋崎海岸など、主に石灰岩分布地域の洞窟堆積物から大型の化石オオカミが発見され、これらは大きさからタイリクオオカミとされた。本州一円にタイリクオオカミもいたのだ。

展示の解説によれば、当時、ナウマンゾウに印象づけられる大型の動物たちは、更新世末期の急激な温暖化による気候変動により、最終的に一万六〇〇〇年前

むなかた・みつる ●1975年生まれ。登山と環境を中心テーマに取材・執筆活動をしている。